

2022 年度 3 月修了 修士論文

ワールドカップ審判を輩出している
アメリカのサッカー審判員育成策

Factors in the U.S. Soccer Referee Training System's
success factors of producing World Cup referees.

早稲田大学 大学院スポーツ科学研究科
スポーツ科学専攻 スポーツビジネス研究領域

5021A020-2

小林 拓矢

研究指導教員： 平田 竹男 教授

目次

第1章	背景	1
第1節	サッカー審判員のライセンス制度	1
第2節	W杯担当レフェリー	2
第3節	アメリカサッカーの成長	4
第4節	本研究の問題意識	6
第5節	先行研究	6
第6節	研究目的	7
第2章	研究方法	8
第1節	文献調査	8
第6項	調査対象	8
第6項	収集するデータ	8
第2節	インタビュー調査	8
第1項	調査対象	8
第2項	インタビュー項目	9
第3章	研究結果	10
第1節	アメリカのサッカー審判員のライセンス制度	10
第1項	アメリカのサッカー審判員のライセンス	10
第2項	ライセンスパスウェイ	11
第3項	各ライセンスの主な担当可能試合	12

第4項	各ライセンスの登録機関	13
第5項	ライセンスごとの審判員の育成担当機関	13
第6項	ライセンス取得のための受験条件	14
第7項	昇格条件.....	16
第8項	その他の条件	17
第9項	ライセンスの更新方法.....	18
第2節	アメリカにおけるサッカー審判員の現状	20
第1項	審判員の統括	20
第2項	National レフェリー、及び National アシスタントレフェリー登録者	20
第3項	National レフェリーコーチ登録者	22
第4項	National レフェリーアサイナー登録者.....	23
第3節	プロ審判機構(Professional Referee Organization)	24
第1項	プロ審判機構とは	24
第2項	プロ審判機構本部とは.....	24
第3項	プロ審判機構支部とは.....	24
第4項	プロ審判機構のスタッフ	25
第5項	プロ審判機構の収益	26
第6項	プロ審判機構のパートナー	27
第7項	所属審判員	27
第4節	プロ審判機構におけるサッカー審判員育成のステップ	31
第1項	プロ審判機構の育成カテゴリー	31
第2項	各カテゴリーの所属人数.....	32

第3項 支部への昇格プロセス.....	33
第4項 プロ審判機構のタレント発掘.....	34
第5項 育成カテゴリーごとの主な担当試合.....	36
第6項 プロ審判機構における審判員育成	37
第7項 プロ審判機構における審判員の昇降格	39
第8項 プロ審判機構におけるアセスメントレポート	40
第5節 アメリカのサッカー審判員関係者へのインタビュー調査.....	41
第1項 MLS 担当審判員 A 氏へのインタビュー.....	41
第2項 MLS 担当審判員 B 氏へのインタビュー	42
第3項 USSF National Referee Coach 兼、MLS の審判アセッサーC 氏への インタビュー	43
第4章 考察	46
第1節 USSF とプロ審判機構の役割	46
第1項 アメリカのサッカー審判制度の特徴.....	46
第2項 USSF の役割.....	46
第3項 プロ審判機構の役割	46
第2節 プロ審判機構の特徴	47
第1項 育成プログラム.....	47
第2項 プロ審判機構のタレント発掘.....	48
第3項 プロ審判機構の育成プログラム	49
第3節 プロ審判機構の成長	50
第1項 プロ審判機構の特徴	50
第2項 プロ審判機構の成長	50

第4節 研究の限界	51
第5章 結論	52
謝辞	53
参考文献・引用文献	54

図 1	日本におけるサッカー審判員のライセンス制度.....	2
図 2	地域ごとに見た W 杯ラウンド 16 以降のレフェリー担当試合数の推移.....	3
図 3	MLS チーム数の推移	4
図 4	MLS 観客動員数の推移.....	5
図 5	アメリカのサッカー審判員のライセンス	10
図 6	アメリカにおけるサッカー審判員のライセンスパスウェイ	11
図 7	ライセンスごとの主な担当試合.....	12
図 8	ライセンスごとの育成担当機関.....	14
図 9	アメリカにおける主なカテゴリーごとの審判員数の内訳	28
図 10	支部への基本的な昇格プロセス.....	34
図 11	支部へ飛び級制度.....	35
図 12	アメリカと日本におけるカテゴリーと育成過程	48
表 1	欧州・南米以外で W 杯ラウンド 16 以降のレフェリーを連続で輩出した国.....	4
表 2	ライセンス取得のための受験条件	15
表 3	ライセンスの更新方法	18
表 4	2022 年 National レフェリーリスト	21
表 5	2022 年 National アシスタントレフェリーリスト	21
表 6	2022 年 National レフェリーコーチリスト	22
表 7	National レフェリーアサイナー.....	23
表 8	BU 所属レフェリーリスト	29
表 9	BU 所属アシスタントレフェリーリスト	30

表 12	プロ審判機構における育成カテゴリー.....	31
表 13	2021 年の各カテゴリーごとの所属レフェリー数	33
表 14	育成カテゴリーごとの主な担当試合	36
表 15	プロ審判機構における審判員育成	37
表 16	プロ審判機構における主な昇降格基準.....	40

第1章 背景

第1節 サッカー審判員のライセンス制度

サッカー審判員(審判員：本論文ではレフェリーとアシスタントレフェリーの両方を指す)のライセンス制度は、各国のサッカー協会(FA)が定める各国のライセンス制度と国際サッカー連盟(FIFA)が定める FIFA のライセンス制度がある。サッカー審判員のライセンス制度は FIFA に加盟している国や地域の FA によって違いがある。日本のサッカー審判員のライセンスは全て日本サッカー協会(JFA)が統括しており、日本におけるサッカー審判員のライセンスは1級から4級までの4段階となっており、国際大会を担当するために必要な FIFA ライセンスを含めると5段階で形成され、それぞれのライセンスに応じて担当できる試合のレベルが決まっている(図1)。

Jリーグ等の国内リーグにおいては、各国 FA の定めるライセンスを取得した審判員が担当可能であり、日本では1級審判員に該当する審判員が担当可能である。しかし、国際大会を担当するためには、各国 FA からの推薦や各大陸 FA での研修・推薦を得て FIFA ランセンスを取得する必要がある、FIFA W 杯を担当するためには FIFA ライセンスを取得後、フィットネステストや国際試合での評価などを元に FIFA の審判委員会で選出される必要がある。

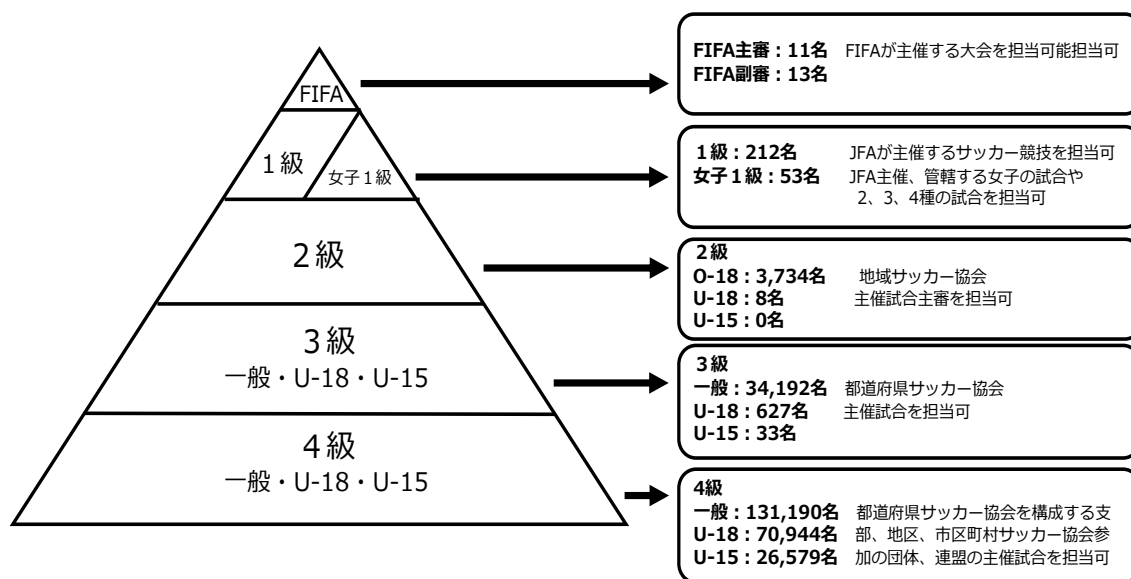


図 1 日本におけるサッカー審判員のライセンス制度

日本サッカー協会 HP より作成

第2節 W 杯担当レフェリー

2002 年から 2022 年までの FIFA W 杯 6 大会で、ラウンド 16 以降の試合を担当したレフェリー(本論文では主審を指す)を地域ごとに見ると、欧州 45、南米 24、北米 14、アジア 10、アフリカ 3(6 大会の合計担当試合数)となっており、欧州や南米などサッカー大国のレフェリーが多くの試合を担当していた(図 2)。

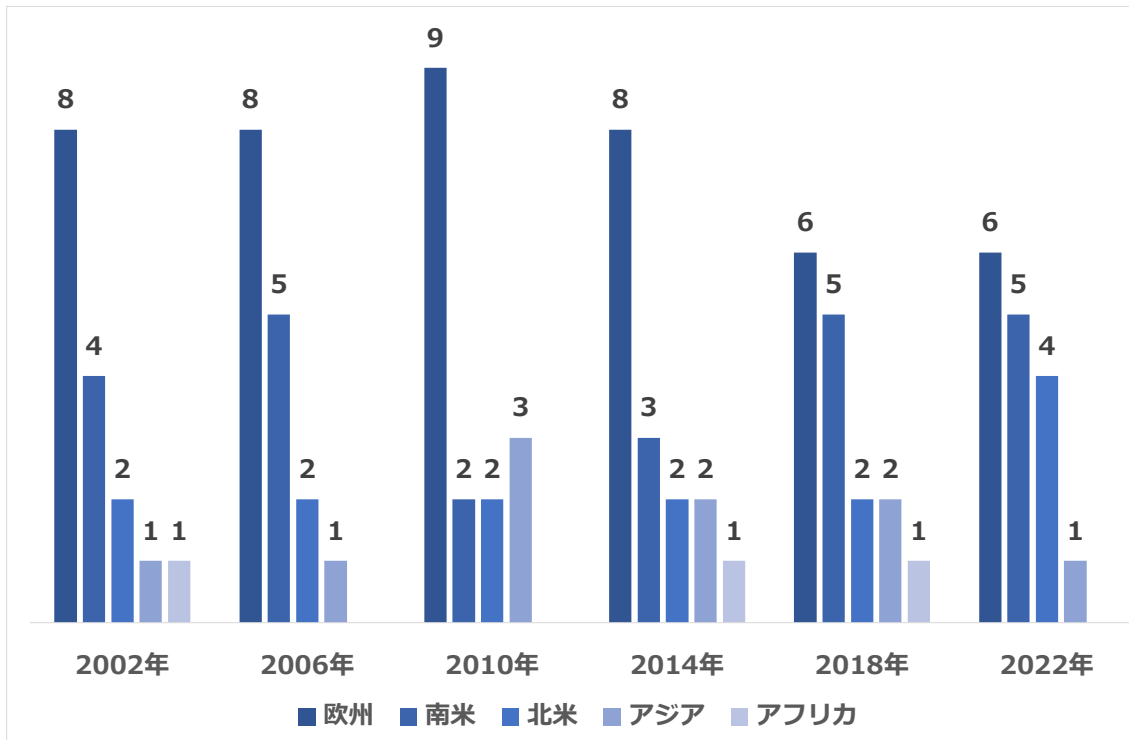


図 2 地域ごとに見た W 杯ラウンド 16 以降のレフェリー担当試合数の推移

欧州、南米を除くと、メキシコ、アメリカ、日本、ウズベキスタンの 4 カ国が W 杯ラウンド 16 以降にレフェリーを輩出していた。メキシコが 2002 年から 2022 年までの 6 大会連続でレフェリーを輩出し、日本が 06 年、10 年、ウズベキスタンが 10 年、14 年とそれぞれ 2 大会連続でレフェリーを輩出していた。アメリカは 14 年大会で初めてラウンド 16 以降にレフェリーを輩出し、18 年、22 年と 3 大会連続でレフェリーを輩出している(表 1)。

表 1 欧州南米以外で W 杯ラウンド 16 以降のレフェリーを連続で輩出した国

	02年	06年	10年	14年	18年	22年
メキシコ	○	○	○	○	○	○
アメリカ	—	—	—	○	○	○
日本	—	○	○	—	—	—
ウズベキスタン	—	—	○	○	—	—

第3節 アメリカサッカーの成長

メジャーリーグサッカー(MLS)のチーム数の増加を見た(図3)。2010 年以降急速にチーム数が増加しており、2023 年シーズンからは St. Louis City SC が参加し 29 チームになる。

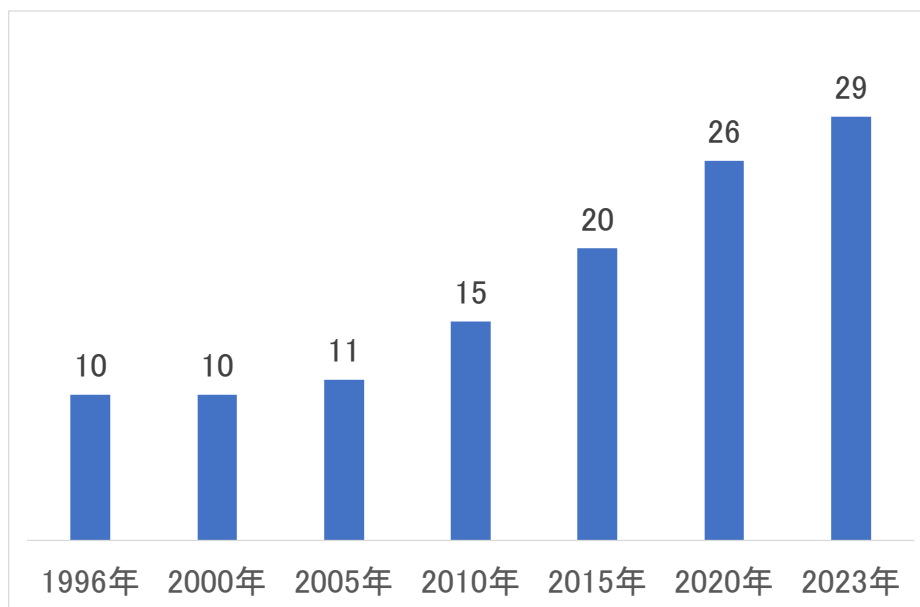


図 3 MLS チーム数の推移

また、MLS の総観客動員数と平均観客動員数の推移を見ると、2020 年以降はコロナウイルスの影響により減少しているが、2010 年から 2019 年までは増加傾向になっていたことがわかる(図 4)。近年 MLS は成長が著しく、NFL 等と並び米国 5 大スポーツと呼ばれる様になっている。この様にリーグの拡大やサッカーへの注目度が高まることで、判定に注目される機会が増加し審判員のレベル向上が求められると考えられる。また、2026 年 FIFA W 杯の開催国でもあることから、アメリカサッカー界としてサッカー審判員の育成にも注力していることが考えられる。

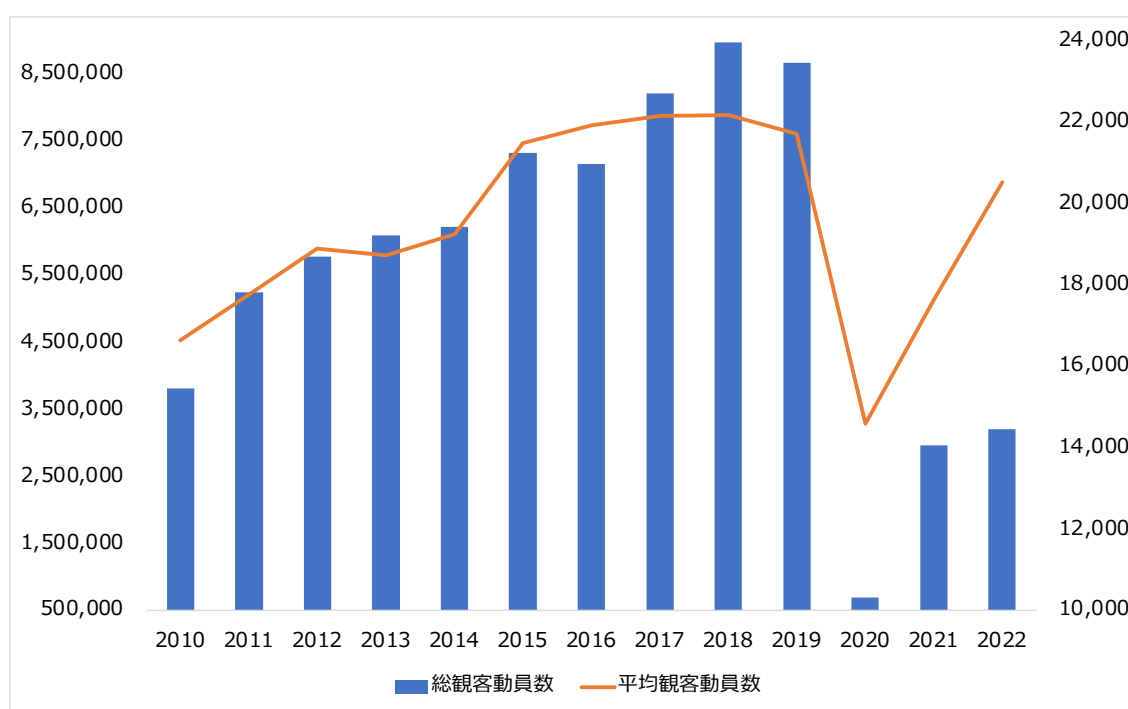


図 4 MLS 観客動員数の推移

MLS 公式 HP より作成

第4節 本研究の問題意識

近年のアメリカサッカーの発展は著しく、審判員においても W 杯を含む国際大会の場で活躍している審判員が増加している。しかし、近年 W 杯担当審判員を連続で輩出しているアメリカのサッカー審判員のライセンス制度や育成策に関する十分な情報はない。また、アメリカのサッカー審判員が W 杯を含む、国際大会等の場で活躍するようになった背景には、アメリカサッカー連盟(以下 USSF)とは別に Professional Referee Organization(PRO と略されることが多い。本論文では、以下、プロ審判機構とする。)プロ審判機構は組織全体を示す。プロ審判機構の存在は知られているが、USSF との役割の違いや具体的な審判員の育成策については明らかにされていない。これらを踏まえ、アメリカサッカー界がどのように審判員の育成を行い、W 杯審判員を輩出できるようになったのかを明らかにすることには意義があると考ええる。

第5節 先行研究

上野(2018)ではドイツのサッカー審判員制度を調査し、審判員の登録先がクラブであり、資格保有者が審判用具の購入補助やブンデスリーガのチケットの無料入手が可能である等の特典を受けられていると述べている。

青山(2015)は、日本のライセンス制度が4つに分かれており昇級には条件が設定されていることや、レフェリーカレッジでの審判育成が2年間という短期間で集中的に実施され、1級審判員を輩出していたことを示している。

Webb ら(2021)は、イングランドサッカー協会における現在の審判育成制度を

調査し、以前に比べ改善されたものの、新しい審判員の発掘にはまだ問題があることを発見した。その改善策として、ソーシャルメディアの活用と各地域協会に裁量権を与えることを提言している。また、現在のパスウェイの有効性に関してのフィードバックがまちまちであることを発見し、Centre of Referee Excellence(CORE)の選考基準が不明瞭であることを挙げている。CORE プロ審判機構グラムに選ばれなければ、十分な教育の機会が与えられないこともあることを問題とし、その改善のために評価の機会の創出と共にメンター制度の導入が審判員育成に役立つと述べている。

John(2022)は、MLS において成功した審判員の特性を個性の表現、ボディーランゲージ、コーチ、及び選手のマネジメント、心理的側面、成長意欲、人間性、審判活動へのコミットメントの 7 項目で定義できるとした。また、レフェリングは複雑な要素が絡み合うことを示しており、審判員の評価やトレーニングは学祭的な努力が必要であること示した。審判員のパフォーマンスの決定要因の評価をフィールド外の要素からも決定することができるのかどうかを検討したが、審判員のスカウト活動や昇降格の判断時に取り入れるには調査が不十分であると述べている。

第6節 研究目的

本研究は、アメリカのサッカー審判員のライセンス制度と審判員の育成策について明らかにすることで、アメリカの W 杯担当審判員を輩出している要因を示すことを目的とする。

第2章 研究方法

第1節 文献調査

第6項 調査対象

USSF のオフィシャル WEB サイト、各州サッカー連盟のオフィシャル WEB サイト、プロ審判機構のオフィシャル WEB サイトおよび、アメリカのサッカー審判員のライセンス制度や育成に関する文献を調査対象とした。

第6項 収集するデータ

ライセンス制度、ライセンスごとの受験資格、評価項目ライセンスごとの担当可能試合、プロ審判機構の所属審判員、プロ審判機構の所属スタッフ、プロ審判機構の育成制度、プロ審判機構の取組みに関するデータの収集を行なった

第2節 インタビュー調査

第1項 調査対象

MLS 担当主審 A 氏、MLS 担当主審兼、FIFA レフェリーB 氏、及び USSF National Referee Coach 兼、プロ審判機構で審判アセッサーを務める C 氏に対してインタビュー調査を実施した

第2項 インタビュー項目

以下の5項目についてインタビュー調査を実施した。

- ①プロ審判機構に関して
- ②キャリアに関して
- ③プロ審判機構での育成の特徴に関して
- ④プロ審判機構の近年の取り組みに関して
- ⑤MLS 担当審判員の組合に関して

第3章 研究結果

第1節 アメリカのサッカー審判員のライセンス制度

第1項 アメリカのサッカー審判員のライセンス

アメリカにおけるサッカー審判員のライセンスは、FIFA、Professional、National、Regional、Grassroots の5段階に分かれていた(図5)。FIFA が最も高いレベルとなっており、Professional、National、Regional、最も低いレベルがGrassroots となっていた。

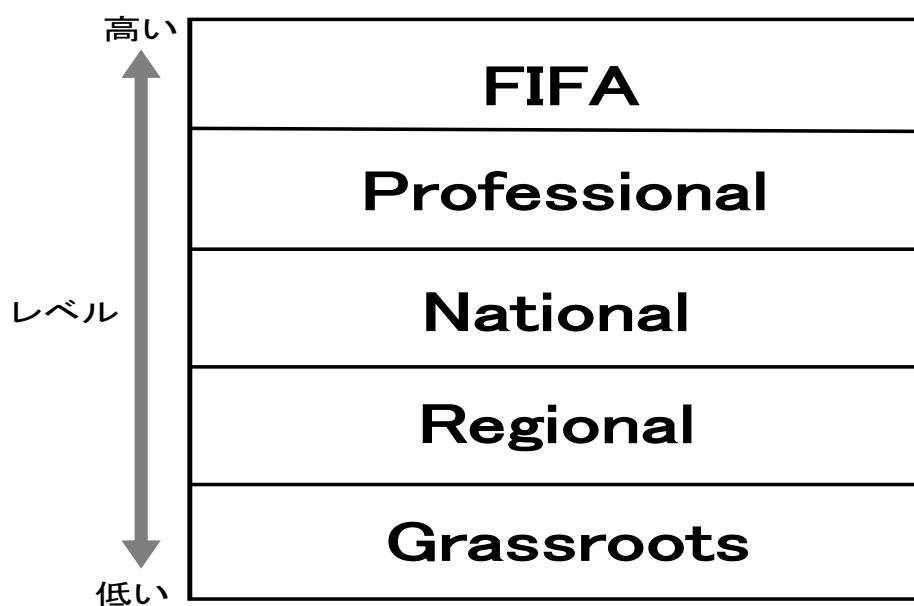


図5 アメリカのサッカー審判員のライセンス

USSF HP より作成

第2項 ライセンスパスウェイ

アメリカのサッカー審判員のライセンスは 5 段階に分かれており、National ライセンスからは、National レフェリーライセンスと National アシスタントレフェリーライセンスの 2 つに分かれていた。National ライセンス取得時に、審判員自身がどちらかを選択しライセンスの取得を目指す形となっており、National ライセンス取得後は、レフェリーまたはアシスタントレフェリー(本論文では副審を指す)のいずれかとして専門性がより求められていた。

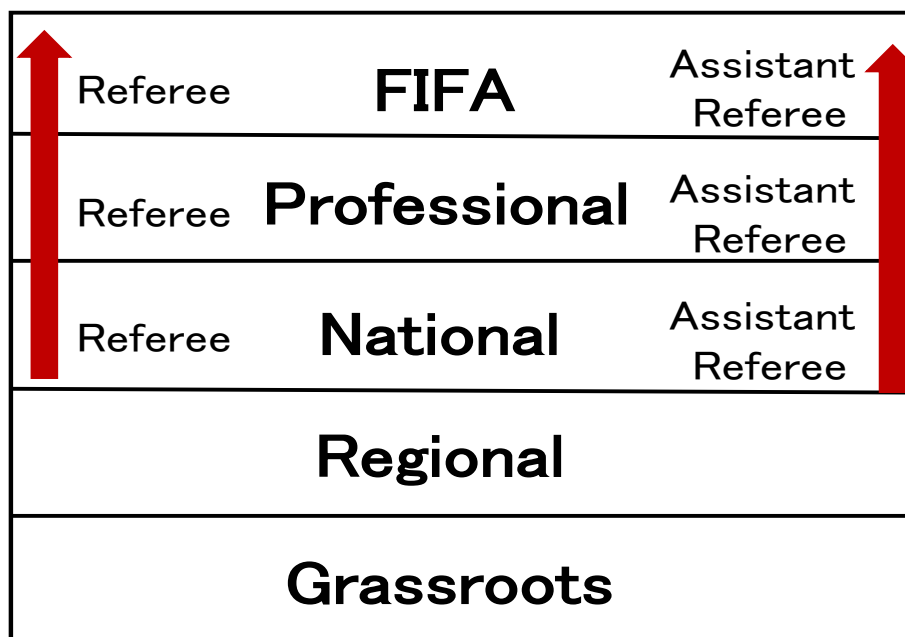


図 6 アメリカにおけるサッカー審判員のライセンスパスウェイ

第3項 各ライセンスの主な担当可能試合

ライセンスごとの主な担当可能試合をまとめた(図6)。FIFAはW杯を含む全ての国際大会、及び国内ではMLSを含む全ての国内大会の担当が可能となっており、国内では主にMLSを担当していた。ProfessionalはMLSを含む全ての国内大会の担当が可能で、主にMLSを担当していた。Nationalは、主にMLSを除くプロ審判機構リーグの試合やアマチュアの全国大会を担当し、Regionalは州大会、Grassrootsはレクリエーションレベルの大会やアマチュアの大会が担当可能となっていた。

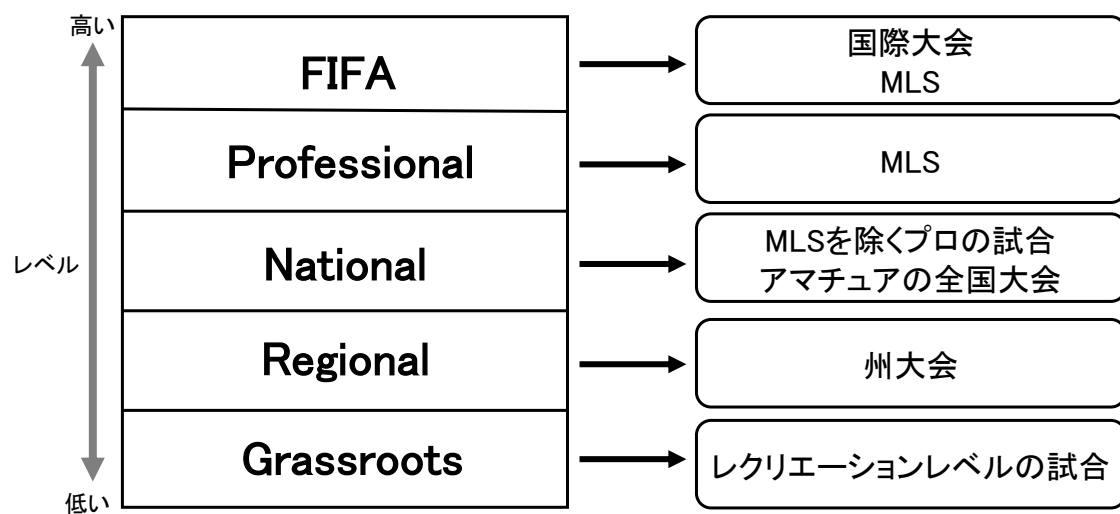


図7 ライセンスごとの主な担当試合

USSF HP より作成

第4項 各ライセンスの登録機関

FIFA ライセンスは USSF の推薦を受け FIFA によって登録され、国内ではプロ審判機構に所属し活動している。Professional はプロ審判機構への登録が必要となり、National は USSF、Regional、及び Grassroots は州協会となっていた。Professional のライセンスを取得している審判員の登録先はプロ審判機構だが、USSF においては National ライセンスまたは FIFA ライセンスのいずれかで登録されていた。

第5項 ライセンスごとの審判員の育成担当機関

FIFA、及び Professional の審判員の育成はプロ審判機構が担当し、National、Regional、Grassroots の育成は USSF が担当していた(図7)。

プロ 審判機構	FIFA
	Professional
USSF (連盟)	National
	Regional
	Grassroots

図 8 ライセンスごとの育成担当機関

第 6 項 ライセンス取得のための受験条件

ライセンス取得のための受験条件は、それぞれのライセンスごとに異なっていた(表 2)。

表 2 ライセンス取得のための受験条件

	受験資格	主な研修	競技規則の理解 /フィットネス基準	実技評価	その他の条件
FIFA	MLSで2年以上	プロ審判機構Preseason Camp	ナショナルテスト /FIFA fitness test	プロ審判機構の 評価基準での合格	SAFE SPORT TRAINED SAFE and HEALTHY PLAYING ENVIRONMENTS NATIONAL (NCSI) BACKGROUND CHECK
Professional	NATIONALで2年以上 プロレベルの試合 (R: 50 or AR: 50以上)	プロ審判機構Preseason Camp	ナショナルテスト /FIFA fitness test	プロ審判機構の 評価基準での合格	SAFESPORT TRAINED SAFE and HEALTHY PLAYING ENVIRONMENTS NATIONAL BACKGROUND CHECK
NATIONAL (R or AR)	REGIONALで2年以上 アマチュア成人レベルでの試合経験 (R: 40, AR: 25以上)	NATIONAL Camp	ナショナルテスト /FIFA fitness test	RまたはARとして 3回以上USSF基準に合格	SAFESPORT TRAINED SAFE and HEALTHY PLAYING ENVIRONMENTS NATIONAL BACKGROUND CHECK
REGIONAL	18歳以上 GRASSROOTSで3年以上 アマチュア成人レベルでの試合経験 (R: 25, AR: 15以上)	REGIONAL Referee Course	ナショナルテスト /FIFA WOMEN's Referee Test	3試合以上での合格評価 (成人レベル: 2回 ユースレベル: 1回)	SAFESPORT TRAINED SAFE and HEALTHY PLAYING ENVIRONMENTS BACKGROUND CHECK
GRASSROOTS	13歳以上	online Inperson Field Session	グラスルーツテスト	—	SAFESPORT TRAINED SAFE and HEALTHY PLAYING ENVIRONMENTS BACKGROUND CHECK

* 注(R=レフェリー、AR=アシスタントレフェリー)

Grassroots、及び Regional では年齢制限が設定されており、Grassroots は 13 歳以上、Regional は 18 歳以上でなければ取得することができない制度となっていた。Regional では、年齢制限のほかに、Grassroots 取得後 3 年以上、成人のアマチュアレベルでの試合経験(レフェリー: 25 試合以上、アシスタントレフェリー: 15 試合以上)が求められていた。National では、Regional 取得後 2 年以上、アマチュア成人レベルでの試合経験(レフェリー: 40 試合以上、アシスタントレフェリー: 25 試合以上)が求められていた。Professional では、National 取得後 2 年以上、プロ審判機構リーグでの試合経験(レフェリー: 50 試合以上または、アシスタントレフェリー: 50 試合以上)が求められており、FIFA では Professional ライセンス取得から 2 年以上という条件が設定されていた。

National から Professional のライセンスを取得するには際には、基本的には州協会あるいは USSF からの推薦が必要となっていた。しかし、Grassroots から National までは、上記の条件を満たしていれば、推薦などは必要なく、審判員自身が応募して受験する形となっていた。

第7項 昇格条件

昇格条件には、研修への参加、競技規則テスト、及びフィットネステストの合格、実技試験の合格があった。Grassroot では online Inperson Field Session への参加、Grassroot レベルのオンラインでの競技規則テストの合格が必要となっており、フィットネステスト、及び実技評価は行われていなかった。Regional では Regional Referee Course への参加、競技規則のナショナルテスト、及び FIFA WOMEN's Referee Test の合格、及び成人アマチュアレベル 2 試合、ユースレベル 1 試合での合格評価が必要となっている。National では、National Camp への参加、競技規則のナショナルテスト、及び自分で選択したレフェリーまたはアシスタントレフェリーレベルの FIFA Referee Test への合格、及び成人アマチュアレベル 3 試合での USSF 基準の合格評価が必要となっている。Professional では、プロ審判機構 Preseason Camp への参加、競技規則のナショナルテスト、及びレフェリーまたはアシスタントレフェリーレベルの FIFA Referee Test への合格、及びプロ審判機構からの割当試合においてプロ審判機構の評価基準での合格が必要となっていた。FIFA では、プロ審判機構 Preseason Camp への参加、競技規則のナショナルテスト、及びレフェリーまたはアシスタントレフェリーレベルの FIFA Referee Test への合格、及び 1 シーズンを通じてのプロ審判機構の評価基準での合格が必要となっていた。

Grassroot から National までの昇格に関しては、条件を満たした審判員が自ら応募し、州の審判員会または、USSF の審判委員会が応募書類とアセスメントレポートをもとに合否を判断する形式となっていた。

第8項 その他の条件

すべてのライセンスにおいて、不適切な指導撲滅を目的とした SAFESPORT TRAINING、及び安全で健康的なプレー環境の提供を目的とした SAFE and HEALTHY PLAYING ENVIRONMENTS の受講が義務付けられていた。また、18 歳以上の審判員は BACKGROUND CHECK を受ける必要があり、National、及び Professional では NATIONAL BACKGROUND CHECK、FIFA では NCSI の BACKGROUND CHECK を受ける必要があった。

第9項 ライセンスの更新方法

ライセンスの更新方法をまとめた(表3)。

表 3 ライセンスの更新方法

	試合経験	主な研修	競技規則の理解 /フィットネス基準	実技評価
FIFA	MLSでの1シーズンの活動	プロ審判機構 Preseason Camp	ナショナルテスト /FIFA fitness test	CONCACAFまたは 国際大会での合格
Professional	RまたはARとして10試合以上	プロ審判機構 Preseason Camp	ナショナルテスト /FIFA fitness test	プロ審判機構の 評価基準での合格
NATIONAL	プロリーグまたは全国大会で RまたはARとして12試合以上	NATIONAL Camp	ナショナルテスト /FIFA fitness test	RまたはARとして 3回以上USSSF基準に合格
REGIONAL	—	オンライン及び REGIONAL Referee Corse	ナショナルテスト /FIFA WOMEN's Referee Test	2試合以上での合格評価 (成人レベル:1回 ユースレベル:1回)
GRASSROOTS	—	オンライン	グラスルーツテスト	—

Grassroots と Regional では更新の際には試合経験は求められていなかった。Grassroots ではオンライン研修および、グラスルーツレベルの競技規則テストが必要となっていた。Regional では、オンラインおよび、対面の研修への参加、ナショナルレベルの競技規則テスト、FIFA WOMEN's Referee Test レベルのフィットネステストへの合格が必要となっており、実技評価では成人レベルの試合1試合、及びユースレベルの試合1試合での合格評価が必要となっていた。National、Professional、FIFA では、試合経験、研修への参加、競技規則テスト、及びフィットネステストへの合格、実技評価への合格が必要となっていた。National では、プロリーグまたは全国大会でレフェリーまたはアシスタントレフェリーとして12試合以上担当する必要がある、National Camp への参加、ナ

ショナルレベルの競技規則テスト、FIFA fitness test への合格が必要となっており、実技評価ではレフェリーまたはアシスタントレフェリーとして 3 試合以上 USSF 基準に合格する必要があった。Professional では、レフェリーまたはアシスタントレフェリーとして 10 試合以上担当する必要があり、プロ審判機構 Preseason Camp への参加、ナショナルレベルの競技規則テスト、FIFA fitness test への合格が必要となっており、実技評価ではプロ審判機構の基準での合格が必要となっていた。FIFA では MLS の試合担当プロ審判機構 Preseason Camp への参加、ナショナルレベルの競技規則テスト、FIFA fitness test への合格が必要となっており、実技評価では CONCACAF または国際試合での FIFA からの合格が必要となっていた。

また、ライセンス取得時と同様に更新の際にも、不適切な指導撲滅を目的とした SAFESPORT TRAINING、及び安全で健康的なプレー環境の提供を目的とした SAFE and HEALTHY PLAYING ENVIRONMENTS の受講が義務付けられていた。また、18 歳以上の審判員は BACKGROUND CHECK を受ける必要があり、National、及び Professional では NATIONAL BACKGROUND CHECK、FIFA では NCSI の BACKGROUND CHECK を受ける必要があった。

第2節 アメリカにおけるサッカー審判員の現状

第1項 審判員の統括

アメリカには、約 14 万人のサッカー審判員がいた。プロ審判機構に所属していない Grassroots、Regional ライセンスの審判員の派遣・統括、プログラム提供は主に州協会が行い、National ライセンスに関しては主に USSF が審判員の派遣・統括、プログラム提供を行っていた。Professional ライセンス取得審判員に関してはプロ審判機構が主にプロ審判機構が審判員の派遣・統括、プログラム提供を行っていた。また、プロ審判機構所属の審判員であると共に、USSF 所属の National あるいは FIFA 審判員でもあった。

州・地域ごとに育成プログラムや主に担当する試合などには違いがあり、National 審判員あるいは Professional 審判員になるまでの州・地域ごとの違いがあった。また、登録審判員数が多い地域は、フロリダ、ロサンゼルス、ニューヨーク、ニュージャージー、テキサス、アトラス、シカゴ等となっていた。

第2項 National レフェリー、及び National アシスタントレフェリー登録者

FIFA、及び Professional の審判員を除いた 2022 年時点の National レフェリー(表 4)、及び 2022 年時点の National アシスタントレフェリー(表 5)をまとめた。National レフェリーは 77 名、National アシスタントレフェリーは 78 名登録されていた。

表 4 2022 年 National レフェリーリスト

Amiel Aleman – FL	Mark Allatin – CA	Eligio Arreguin – CA	Samantha Martinez – CA
Luis Arroyo – NJ	Jervis Atagana – MO	Omeed Azadpour – CA	Ben Meyer – GA
Malik Badawi – CA	DeShun Beard – AK	Alex Beehler – IL	Esad Omanovic – IA
Nabil Bensalah – IN	Alex Billeter – FL	Kevin Broadley – NC	Izlen Peksenar – SC
Karen Callado – CA	Alejo Calume – FL	Wes Caouette – TN	Calin Radosav – IL
Christian Centeno – NY	Alex Connelly – LA	Ernie Constantine – NY	Kenneth Rojas – NY
Matt Corrigan – OK	Jordan Davis – NC	Sergii Demianchuk – GA	Austin Saini – OH
Greg Dopka – IL	Josh Encarnacion – PA	Nickrod Fateh – VA	Thomas Snyder – NY
Ricardo Fierro – CA	Kevin Fikar – OH	Gerald Flores – TX	Dejan Susak – AZ
Reyna Fonseca * – CA	Matt Franz – VA	Elton Garcia – TX	Robert Vincze – CA
Brandon Gardner – TX	Matt Geringer – MO	Adrian Gonzalez – CA	Adam Zarrin – CA
John Griggs – VA	Daniel Gutierrez – FL	Gary Gutierrez – MD	John Matto – NC
Amin Hadzic – GA	William Hale – TX	Lorenzo Hernandez – TX	Andrew Musashe – AK
Randy Hoffman – CA	Brad Jensen – UT	Kyle Johnston – GA	Elvis Osmanovic – FL
Adam Kilpatrick – MA	Jose Lara – AK	Alex Mariscal – CA	Jasmine Peralta – FL
Jeremy Scheer – CT	Laura Rodriguez – CO	Corbyn May – OR	Melvin Rivas – TX
Brandon Stevis – CA	Chris Ruska – MN	Alyssa Nichols – FL	John Rush – NC
Matt Thompson – MS	Eric Tattersall – OH	Rebecca Pagan – IL	Joseph Salinas – CA
Brian Wood – MN	Anya Voigt – FL	Michael Radchuk – CA	Gustavo Solorio – NC
Aleks Zhelyazkov – GA			

USSF HP より作成

表 5 2022 年 National アシスタントレフェリーリスト

Art Arustamyan – IL	Will Aten – VA	Nick Balcer – MI	Christian Lara – CA
Fritz Barberousse – FL	Seth Barton – OK	Melissa Beck – AZ	Kevin Lock – TX
Francisco Bermudez – TX	Jake Brochu – MI	Ethan Buege – IL	Becca Luther – TN
Eric Burton – IN	Andrew Charron – VA	Zeno Cho – NJ	Brian Marshall – GA
Christian Clerc – WA	Eric del Rosario – IL	James Duling – OH	Zach McWhorter – TN
Albert Escovar – FL	Tom Felice – CT	Justin Fillmore – CA	Christian Little – MI
Alexandru Focea – NY	Zach Gaidar – IL	Conrad Garcia – CA	Justen Lopez – NY
Karsten Gillwald – UT	Melissa Gonzalez – CA	Andrew Hanks – CA	Justin Mack – IA
Walt Heatherly – TN	Jacob Herold – CO	Austin Holt – AL	Seth Martin – WA
Justin Howard – NC	Kevin Huet – GA	Babucarr Jallow – WA	Mike Nickerson – OH
Eduardo Jeff – CA	Ryan Jung – OR	Shane Kennard – MO	Ian Mangione – CT
Chris Kloc – TN	CJ Koll – OR	John Krill – MN	Matt Trotter – OK
Ricardo Ocampo – TX	Ben Pilgrim – MD	Jeremy Smith – NC	Kali Smith – UT
Cephas Quartson – WA	Salvador Reyes – CA	Joe Suchoski – SC	Amilcar Sicaju – RI
Ben Rigel – GA	Bennett Savage – UT	Nicola Vesia – MA	Salma Perez – CA
Chris Schurfranz – KY	Cameron Siler – WA	Eric Wood – MN	Logan Reeves – MS
Nick Seymour – VA	Steven McGonagle – CA	Mark Novosel – AZ	Matt Rodman – MO
Jeff Skinker – VA	Jacob Little – MI	Rachel Smith – IL	Matt Schwartz – NV
Diego Lucio – FL	A. Max Smith – VA	Tiff Turpin – TX	Patrick Slane – VA
Katarzyna Wasiak – WA	Matt Seem – NE		

USSF HP より作成

第3項 National レフェリーコーチ登録者

プロ審判機構のレフェリーコーチを除く、2022年時点の National レフェリーコーチをまとめた(表6)。National レフェリーコーチは、107名登録されていた。これらのレフェリーコーチは主に National 審判員の育成を行っていた。

表6 2022年 National レフェリーコーチリスト

Kris Bailey – AL	Eric Boria – IL	Aaron Hernandez – KY	Lee Suckle – NY
Richard Heron – AZ	Tim Weyland – CA	Alan Kelly – MA	Greg Watson – FL
Kelly Mock – CA	Chuck Locke – CO	Kara Honthumb – MA	Rachel Woo – MA
Thomas Bobadilla – CA	Rick Eddy – IL	Jared Peeler – AR	Abbey Okulaja – IL
Ali Hacock – CA	Bryan Roslund – MD	Alan Black – CA	Pedro Trejo – IL
Veronica Lee – CA	Paula Hildman – MN	Farhad Mansourian – CA	Carlos Folino – MI
Sin Hang Lai – CT	Amanda Ross – AL	Vince Cortes – CA	Shane Butler – MO
Arthur (Chip) Reed – NY	Brandon Marshall – AZ	Nathan Lacy – CA	Mark Kadlecik – NC
Sharon Wheeler – NY	Tarek Khan – CA	Scott Weyland – CA	Jon Wilson – NC
Tim Geis – FL	Matt Buckman – CA	Rudy Bettman – CO	Albert Calise – NJ
Nami Imaizumi – FL	Kia Dehpanah – CA	John Collins – CT	Barry Towbin – NJ
Kermit Quisenberry – FL	Said Ravanfar – CA	Steve Montanino – NY	Sandra Serafini – OR
Bob Heilman – GA	Esse Baharmast – CO	Dennis Engers – FL	Michael Piercey – PA
Ben Trevino – IN	Scott McGaslin – CO	Jason Cullum – MD	Margaret Domka – SC
Brian Darling – KY	Kevin Barci – NY	Larry Rodriguez – GA	Mort Sajadian – VA
Scott Kachmarik – MA	Paul Rejer – NY	Rich Grady – IL	Philippe Dor – WA
Rob Fereday – MD	Brendan Barry – FL	Tony Crush – KY	Bob Petersen – MN
Yuya Kiuchi – MI	Jozef Michna – FL	Jason Cullum – MD	Ernie Fisher – NC
Kari Seitz – MI	Alex Prus – FL	Artem Sher – MN	Abbas Piran – NC
Igor Reznik – MI	Patrick Baker – GA	Steve Olson – MN	Erich Simmons – NH
Harlan Matthews – TX	Troy Cohrs – MN	Josh Patlak – OR	Mark Geiger – NJ
Masoud Rasti – TX	Ali Saheli – MO	Joseph Machnik – SC	Rizal Milliken – OH
Paul Scott – UT	Kim Oberle – NC	Jeff Kattawar – TX	Nasser Sarfaraz – TX
Ed Marco – VA	Ken George – NC	Jim Mills – TX	Dick Triche – TX
Charles Watts – VA	Greg Barkey – NJ	Gibby Widner – TX	James Conlee – VA
Craig Lowry – PA	Jeff Mellon – OH	Bill Dittmar – VA	George Vergara – VA
Skye Arthur Banning – SC	Ryan Cigich – TX	Ray Moffatte – WA	

USSF HP より作成

第4項 National レフェリーアサイナー登録者

2022 年時点の National レフェリーアサイナー(National 審判員の割当て担当者)は 33 名おり、各アサイナー担当地域の試合に National 審判員の割当てを行っていた。また、Assigning Pool や Supplemental Assigning Pool 所属審判員の試合割当てを担当しており、プロ審判機構のスタッフが昇格候補者の試合を見ることができるようにスケジュールの調整なども行っていた。

表 7 National レフェリーアサイナー

名前	割当て担当地域	名前	割当て担当地域
Skye Arthur-Banning	SC	Michael Piercey,	EPA
David Augustavo	WA	Ali Saheli	S. IL, KS, MO
Kevin Barci	PAW, WNY	Shane Smith	IA
Matt Buckman	CAN, NV	Dan Stupca	MN
Ryan Cigich	AK, OK	Lee Suckle	ENY
Cliff Clement	NC	Susan Terry	NTX
Jason Cullum	MD	Dick Triche	STX
Brian Darling	KY	Bill Walker	AL
John Douglas	MI	Bob Wertz	LA
Deanna Duncan-Allen	CO	Mike Wright	GA
Scott Harward	UT	Jason Perlewitz	OR
Ken Henriques	NJ	Shaun Papperman	DCV, WV
Jack Houston	NM	Abbey Okulaja	IL, IN, WI
Leland Grant	TN	Kelly Mock	CAS
Chris McConkey	AZ	Brian Miller	OH
Mike Mekelburg, Sr.	FL	Rachel Woo	ME, VT, NH, RI, MA, CT
Thai Huynh	MS		

USSF HP より作成

第3節 プロ審判機構(Professional Referee Organization)

第1項 プロ審判機構とは

プロ審判機構は、2012年11月に USSF と MLS により、設立され、USSF、MLS、カナダサッカー協会、ユナイテッドサッカーリーグ、ナショナル女子サッカーリーグなどと協力し、審判員の派遣や育成プログラムの提供を行っていた。プロ審判機構の育成、及び審判派遣は本部と支部で行っている。本部は、BU(MLS 担当審判員)の審判員、支部は MLS 以外のプロリーグを主に担当する TierA から TierC(育成カテゴリーの審判員)、及び昇格候補である Assigning Pool や Non-BU 審判員の育成を行っていた。

第2項 プロ審判機構本部とは

プロ審判機構本部(PRO と言われることが多い。本論文では、以下本部とする。)は、MLS 担当審判員の育成と派遣を行っていた。活動目的は、「アメリカとカナダのプロリーグでの審判の質を高め、若い年齢でより専門性の高い審判員を育成し、国際大会において米国とカナダを代表する審判員を輩出する」事となっていた。

第3項 プロ審判機構支部とは

プロ審判機構支部(PRO2 といわれることが多い。本論文では、以下支部とする。)は、MLS 以外のプロリーグ担当審判員の育成や派遣を行っていた。活動目的は、「将来的な MLS 担当審判員の発掘・育成を行うとともに、MLS 以外の提

携リーグに質の高い審判員を派遣する」事となっていた。

第4項 プロ審判機構のスタッフ

2022年時点のゼネラルマネージャーは、イングランドのハワード・ウェブ氏が務めていた。ウェブ氏は2003年から2014年までプレミアリーグの主審として活動し、国際審判員としては2010年と2014年のW杯2大会に派遣され、2010年にはUEFAチャンピオンズリーグとFIFA W杯の両トーナメントの決勝戦レフェリーを担当した。また、審判員指導のトップは、アメリカのマーク・ガイガー氏が務めていた。ガイガー氏は2004年から2018年までMLSの主審として活動し、国際審判員としては2014年、2018年のW杯2大会に派遣され、アメリカのレフェリーとして初めてW杯ラウンド16の試合のレフェリーを担当した。

プロ審判機構のサポートスタッフは合計で20名在籍していた。

Headquarters Staff(本部スタッフ)には、ゼネラルマネージャーのハワード・ウェブ氏、最高執行責任者のニック・プリマヴェーラ氏、財務・会計部門ディレクターのジョン・ローダー氏、人事・企画担当のサラ・ベティソン氏、エグゼクティブアシスタントのヨランダ・サミュエル氏、ファイナンシャルコーディネーターのダックス・アルマザン氏の6名が在籍していた。

Senior Match Officials(BU所属審判員の育成)部門には、審判指導部門のトップのマーク・ガイガー氏、シニアレフェリーマネージャーにアラン・ケリー氏、シニアアシスタントレフェリーマネージャーにカナダのジョー・フレッチャー氏、ビデオレビューマネージャーにグレッグ・バーキー氏、テクニカルプログラ

ム、及びタレント発掘にアラン・ブラック氏の 5 名が在籍していた。

PRO2 Match Officials(支部所属審判員の育成)部門には、支部の審判指導トップのアレックス・プルス氏、支部のレフェリーコーチの統括にマーク・カドレシク氏とエリック・シモンズ氏の 3 名が在籍していた。

Sports Science 部門には、スポーツ科学部門のトップのトム・ベックバーミット氏、スポーツ医科学部門トップのリサ・スタランズ氏、スポーツ科学者のジョン・ウェストブルックス氏の 3 名が在籍していた。

Strategic Initiatives and Innovation(成長戦略と戦略的改革)部門には、臨時のトップとしてニコル・ワード氏、ビデオアナリストのエイミー・エドワーズ氏、イノベーション、及びオペレーションの調整役にリーシャ・アルシア氏の 3 名が在籍していた。

プロ審判機構での仕事を本業としているスタッフは上記の計 20 名だが、そのほかにも業務委託などの形でプロ審判機構の一員として活動しているスタッフがいた。

第 5 項 プロ審判機構の収益

2022 年のプロ審判機構の収益は約 20 億円だった。収入源は、契約しているリーグや連盟(協会)からの審判員の育成・派遣の受託費用、及びスポンサー収入となっていた。

第6項 プロ審判機構のパートナー

2022年時点のプロ審判機構のパートナーは、7つとなっていた。まずは、MLS、USSSF、ナショナルウィメンズサッカーリーグ(NWSL)、ユナイテッドサッカーリーグ(USL)のリーグ運営本部や連盟がパートナーとなっていた。

次に、capelli SPORT というウェアの提供等を行っているスポーツメーカー、Ref DGE という主にバニシングスプレーの販売を行っている企業、TRACAB という映像分析などを専門とする企業がパートナーとなっていた。

第7項 所属審判員

2022年時点で本部には、レフェリー28名、アシスタントレフェリー44名の合計72名が所属していた。支部には、レフェリーとアシスタントレフェリーを合わせて80名が所属し、Assigning Pool レフェリーや Assigning アシスタントレフェリーなどの支部への昇格候補を合わせると222名が所属していた。

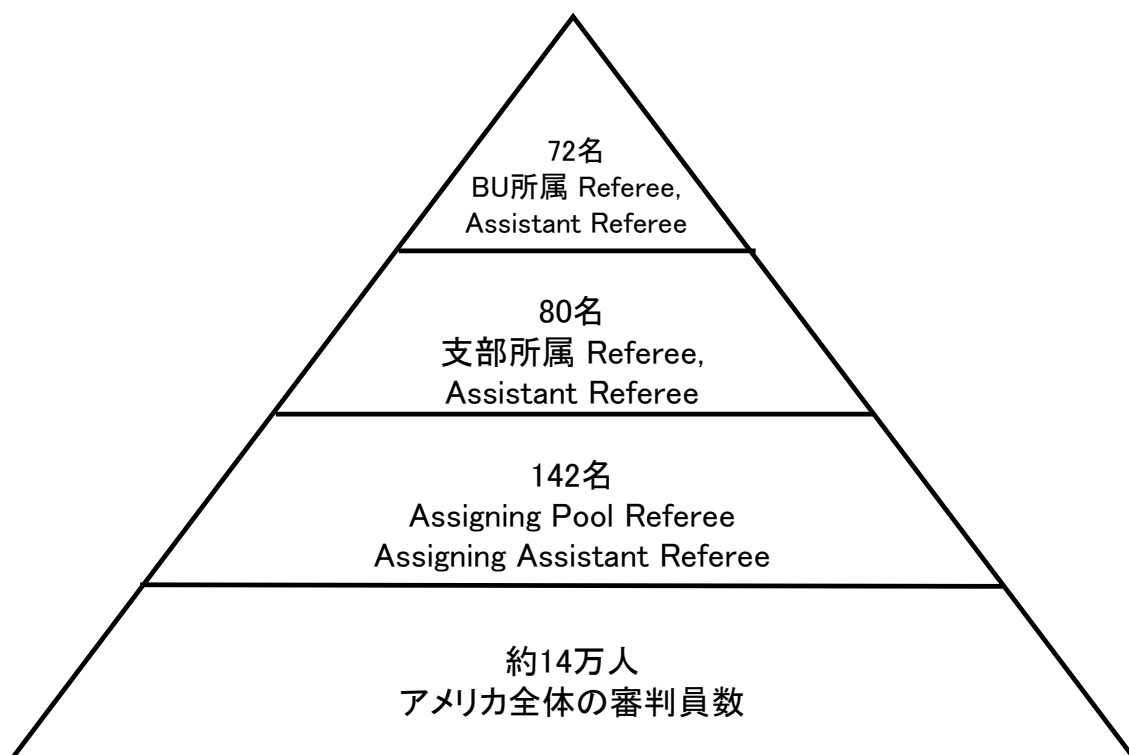


図 9 アメリカにおける主なカテゴリーごとの審判員数の内訳

BU 所属レフェリー(MLS 担当レフェリー)28 名をまとめた(表 8)。28 名中 13 名が FIFA レフェリーとして登録されていた。

表 8 BU 所属レフェリーリスト

名前	FIFA	名前	FIFA
Mark Allatin		Jair Marrufo	
Fotis Bazakos		Rosendo Mendoza	
Allen Chapman	○	Ismir Pekmic	
Alex Chilowicz		Chris Penso	○
Matthew Conger	○	Tori Penso	○
Marcos DeOliveira		Michael Radchuk	
Joe Dickerson	○	Victor Rivas	○
Filip Dujic		Nima Saghafi	○
Ismail Elfath	○	Robert Sibiga	
Drew Fischer	○	Lukasz Szpala	
Tim Ford	○	Ramy Touchan	
Jon Freemon		Ted Unkel	
Guido Gonzales Jr		Rubiel Vazquez	○
Pierre-Luc Lauziere	○	Armando Villarreal	○

プロ審判機構 HP より作成

BU 所属アシスタントレフェリー(MLS 担当アシスタントレフェリー)44 名をまとめた(表 9)。 44 名中 20 名が FIFA アシスタントレフェリーとして登録されていた。

表 9 BU 所属アシスタントレフェリーリスト

名前	FIFA	名前	FIFA
Frank Anderson	○	Kevin Lock	
Ian Anderson		Felisha Mariscal	○
Lyes Arfa	○	Brooke Mayo	○
Kyle Atkins	○	Ian McKay	
Micheal Barwegen	○	Oscar Mitchell-Carvalho	
Andrew Bigelow		Meghan Mullen	○
Cameron Blanchard	○	Matt Nelson	
Diego Blas		Kathryn Nesbitt	○
Chantal Boudreau	○	Corey Parker	○
Logan Brown	○	Ben Pilgrim	
Jose Da Silva	○	Brian Poeschel	
Brian Dunn		Cory Richardson	○
Chris Elliott		Corey Rockwell	○
Gianni Facchini		Mike Rottersman	
Adam Garner		Kali Smith	○
Ryan Graves		Jeffrey Swartzel	
Jeffrey Greeson		Stefan Tanaka-Freundt	○
Jeremy Hanson		Nick Uranga	○
Walt Heatherly		Chris Wattam	○
Eduardo Jeff		Jason White	
Jeremy Kieso	○	Adam Wienckowski	
Kevin Klinger		Tyler Wyrostek	

プロ審判機構 HP より作成

第 8 項 審判員の契約に関して

プロ審判機構では、BU 所属レフェリーである 28 名のみが、プロ契約を結び審判活動を行っていた。BU 所属アシスタントレフェリーを含み、MLS 担当レフェリー以外はプロ契約を結んでいないため、審判活動とは別に本業との両立をしながら活動を行っていた。

第4節 プロ審判機構におけるサッカー審判員育成のステップ

第1項 プロ審判機構の育成カテゴリー

プロ審判機構における育成カテゴリーは6段階に分けられていた(表12)。本部は Professional ライセンスを取得し、MLS を担当する審判員の育成を行い、支部は Professional ライセンスを取得するまでの育成を行っていた。

表 10 プロ審判機構における育成カテゴリー

育成機関	ライセンス	カテゴリー	レフェリーのレベル
本部	Professional	BU	FIFA レフェリー MLS担当審判員
支部	National	Tier A	BUへの昇格候補
		Tier B	Tier2A昇格候補
		Tier C	支部の育成初期ステップ
		Assigning Pool	推薦による支部昇格候補
		Non-BU	スカウトによる支部昇格候補

最上位には、BU という FIFA 審判員や MLS 担当審判員が属するカテゴリーがあった。将来的な BU 所属審判員の育成を主な目的とする支部には、Tier A、Tier B、Tier C、Assigning Pool、Non-BU と 5 つのカテゴリーがあった。Tier A

は支部における最上位であり、本部への昇格候補審判員が所属していた。Tier B は Tier A への昇格候補であり、支部におけるタレントプールの役割を果たしていた。Tier C は支部における育成の初期ステップとされており、Assigning Pool には将来的な BU 所属審判員候補、及び年齢などの理由により MLS を担当することは難しいが支部を支える審判員が所属していた。Non-BU は支部の育成担当スタッフにより将来的に可能性があると判断された審判員が所属しており、それらの審判員は USSF において National ライセンスを未取得の審判員も含まれていた。

第2項 各カテゴリーの所属人数

2021 年時点で各カテゴリーに所属しているレフェリーの人数をまとめた(表 14)。BU 所属審判員が 28 名、Tier A 所属審判員が 6 名、Tier B 所属審判員が 8 名、Tier C 所属審判員が 16 名となっていた。

Assigning Pool 全体の所属人数は 142 人となっているが、レフェリーとアシスタントレフェリーの人数の内訳はわからなかった。しかし、Assigning Pool と Non-BU に所属しているレフェリーの合計は約 100 名とされていた。

表 11 2021 年の各カテゴリーごとの所属レフェリー数

育成機関	カテゴリー	所属人数
本部	BU	28人
支部	Tier A	6人
	Tier B	8人
	Tier C	16人
	Assigning Pool	－
	Non-BU	－

第3項 支部への昇格プロセス

支部への昇格対象審判員は、通常 National ライセンスを取得している審判員である。基本的な昇格プロセスは、National ライセンス取得者が州協会からの推薦を受け、Assigning Pool、または Supplemental Assigning Pool に所属し、ビデオスカウトやグループ指導の機会を得るとともに、試合と試合以外での資質についてプロ審判機構のスタッフから評価を得ることで支部へ昇格することができる形となっていた。Supplemental Assigning Pool には、Regional ライセンスの一部の審判員も含まれていた。

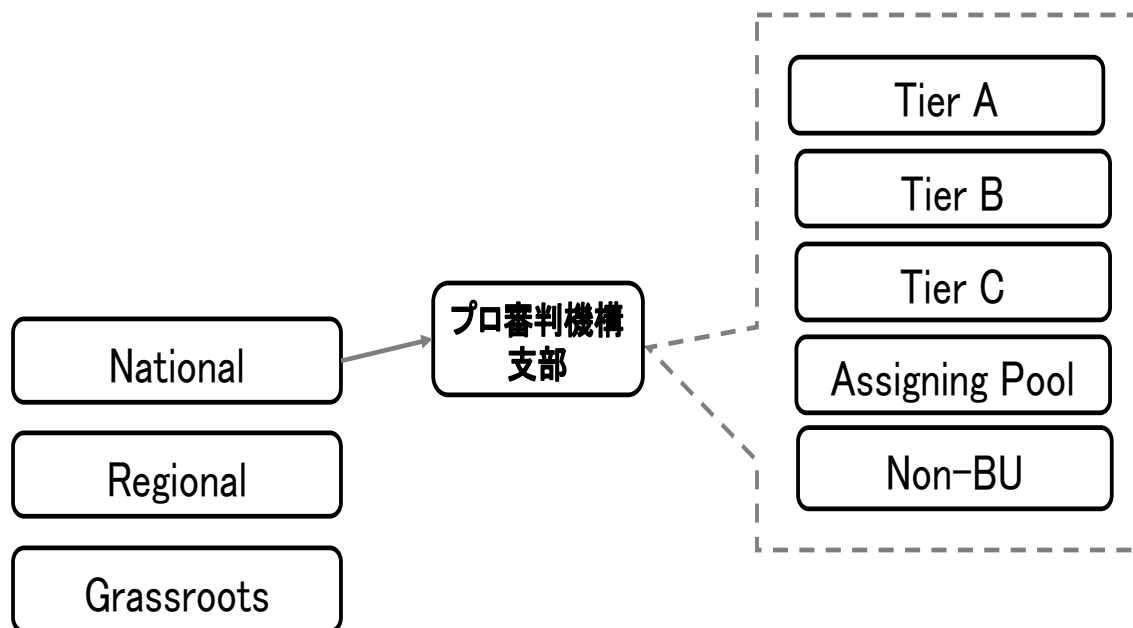


図 10 支部への基本的な昇格プロセス

第4項 プロ審判機構のタレント発掘

プロ審判機構には、プロタレント ID と呼ばれる審判員のスカウト担当者がいた。プロタレント ID は、プロ審判機構タレント Identifiers と呼ばれるプロ審判機構のスカウト担当者と、USSF レフェリーコーチによってメンバーが形成されていた。

プロ審判機構の審判員発掘には、飛び級のような制度があった(図 11)。USSF では National ライセンスを未取得だとしても、将来性があると判断されると Non-BU に所属し、支部でのトレーニングや教材の使用、試合のフィードバック等の育成を受ける機会を得ることができる制度となっていた。

スカウトされるためには、プロタレント ID が参加する MLS Next、Generation Adidas などの大会や、National Youth Association、US Amateur が主催するイベ

ントをプロ審判機構のウェイブサイトや USSF のコミュニケーションチャンネル等で探し、審判員として参加する必要があった。それらのイベントに参加し、プロ審判機構のスカウトスタッフからの評価を得ることで、Non-BU の候補となり、その後セミプロの試合やハイレベルなアマチュアの試合でのビデオスカウトまたは、プロ審判機構の割当による公式戦での評価の機会が与えられ、その場で一定以上の評価を得ることができると Non-BU への昇格が決定する。

これらの審判員は、Non-BU での育成を受けながらプロ審判機構で活動することができるが、プロ審判機構での活動とは別に USSF での活動を継続し、National ライセンスを取得しなければ Tier C へ昇格できない仕組みとなっていた。

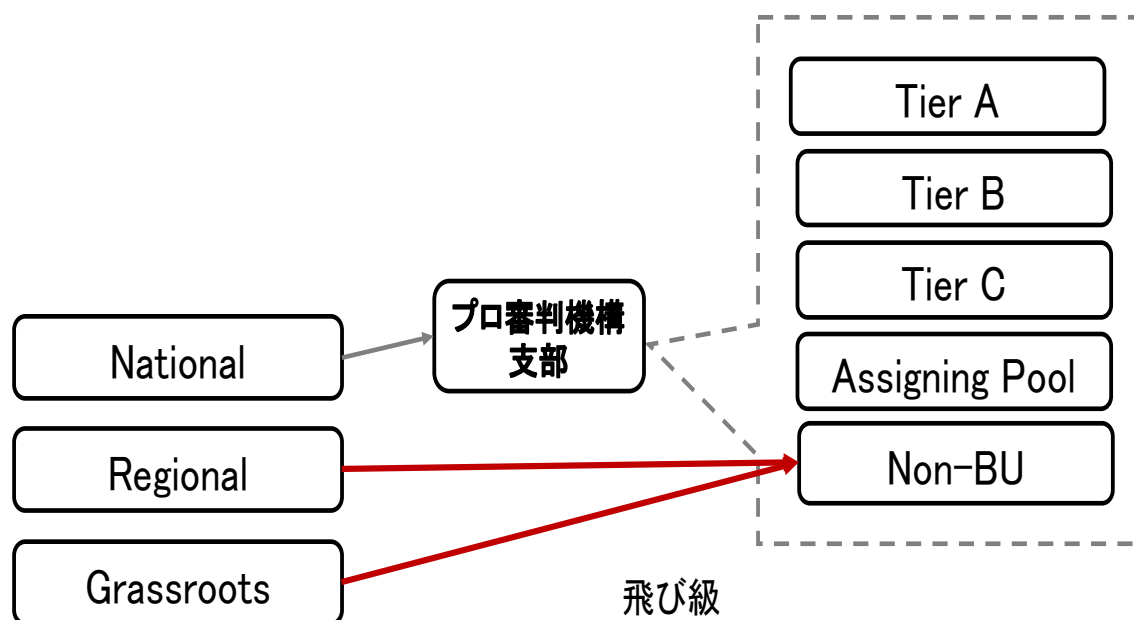


図 11 支部へ飛び級制度

第5項 育成カテゴリーごとの主な担当試合

カテゴリーごとの主な担当試合をまとめた(表 14)。BU の審判員は MLS を担当し、Tier A の審判員は USL-C、NWSL の注目度の高い試合と MLS の第 4 の審判員を主に担当し、BU への昇格候補者には MLS で審査試合を担当する機会が与えられていた。Tier B の審判員は、USL-C、NWSL の注目度の高い試合と MLS の第 4 の審判員を主に担当しており、Tier C の審判員は USL-C、NWSL、USL 1 を主に担当し、MLS の第 4 の審判員を担当する機会が与えられていた。Assigning Pool の審判員は、NWSL、USL1 と USL-C を担当し、Non-BU の審判員は USL1 の試合を担当する機会が与えられ、Assigning Pool への昇格候補者には USL-C で審査試合を担当する機会が与えられていた。

表 12 育成カテゴリーごとの主な担当試合

カテゴリー	主な担当試合
Tier A Tier B	MLS USLチャンピオンシップ(実質2部リーグ) NWSL(女子のトップリーグ)
Tier C Assigning Pool	USLリーグ1(実質3部リーグ) USL-C、NWSL
Non-BU	USL1

第6項 プロ審判機構における審判員育成

本部では、毎試合へのアセッサー派遣、年数回の対面研修、週1回のオンライン研修を通じての育成が主に行われていた。

支部の Tier A から Tier C では、本部と同様に毎試合へのアセッサー派遣、年数回の対面研修、週1回のオンライン研修による育成が行われていたと共に、月1回程度の試合への派遣、及び週1回の審判コーチによる指導が行われていた。Assigning Pool においては、Tier A から Tier C までの育成と基本的に同じだが、アセッサー派遣の試合数、及び審判コーチによる指導の回数は少なくなっていた。Non-BU では、月1回程度のアセッサー派遣または、ビデオによる振り返り、及び年数回の対面での研修が実施されていた。

表 13 プロ審判機構における審判員育成

育成機関	カテゴリー	育成
本部	BU	アセッサー派遣(毎試合) 対面研修(年数回) オンライン研修(週1回)
支部	Tier A Tier B Tier C	審判コーチによる指導(週1回) アセッサー派遣(毎試合) 対面研修(年数回) オンライン研修(週1回)
	Assigning Pool	アセッサー派遣(月1回程度) 対面研修(年数回) オンライン研修(週1回)
	Non-BU	アセッサー派遣(月1回程度) 対面研修(年数回)

研修会はプロ審判機構 Preseason Camp を含め、カテゴリーごとの集合研修として年に数回実施されていた。

トレーニングの提供では、カテゴリーごとに集合でトレーニングを行う機会や、各審判員が実施する普段のトレーニングメニューの提供がされており、トレーニングメニューの作成、負傷後の復帰支援などには Sports Science 部門のメンバーも関わっていた。

グループ指導では、カテゴリー内において少人数のグループを形成し、プロ審判機構のスタッフからの指導だけでなく、審判員同士でスキルアップすることのできる機会の提供を行っていた。BU であれば、72 名でのディスカッション形式のスキルアップ機会の提供や、より少人数のグループによるプログラム提供などがされていた。

試合を通じての育成では BU の審判員には、試合では審判アセッサーを派遣しその試合での評価や審判員へのフィードバックを行っていた。

支部での育成では、審判員のレベルに合わせた試合の割当による段階的な育成、審判アセッサーの派遣、支部の審判コーチによる育成が行われていた。

審判アセッサーの派遣では、支部に所属する審判員がプロ審判機構からの割当試合を担当する際にはアセッサーが派遣され、審判員の評価、及び審判員へのフィードバックを行っていた。

審判コーチによる指導では、各審判員に審判コーチが付けられており、シーズンの目標の設定を行い、審判コーチが月に 1 回のペースで担当審判員の試合を見る機会を作ると共に、週ごとに zoom 等でのディスカッションの機会を設けていた。週ごとのディスカッションを通じて審判員のパフォーマンス向上、シーズン目標達成に向けた短期的な取組みの方向性の決定などを行っていた。週ごとのディスカッションの際には、審判コーチが見た試合やアセッサーから

のアセスメントレポートを元にした分析が行われ、その1試合だけでなく長期的な視点からの審判員の課題抽出や課題解決のサポート、ストロングポイント強化等のサポートが行われており、継続的な育成が実施されていた。

第7項 プロ審判機構における審判員の昇降格

プロ審判機構における昇格条件をまとめた。(表4)各カテゴリーにおける昇格条件は、Tier A から BU への昇格の際には、総合評価(プロ審判機構 Preseason Camp での評価、FIFA fitness test への合格、そのシーズンにおける試合での評価等を加味)、及び MLS トライアルゲームでの評価と VAR 研修への参加が条件となっており、Tier B から Tier A への昇格では総合評価(プロ審判機構 Preseason Camp での評価、FIFA fitness test への合格、そのシーズンにおける試合での評価等を加味)により判断されていた。Assigning Pool から Tier B までの昇格では総合評価(プロ審判機構 Preseason Camp での評価、FIFA fitness test または、FIFA WOMEN's fitness test への合格、そのシーズンにおける試合での評価等を加味)で判断されており、Non-BU から Assigning Pool への昇格の際には総合評価(FIFA fitness test または、FIFA WOMEN's fitness test への合格、そのシーズンにおける試合での評価等を加味)により判断されていた。

プロ審判機構内での昇降格はシーズン開幕前、及び前期後期の中断期間と1シーズンに2回あり、本部、及び支部のスタッフ、審判コーチによる会議において、各審判員ごとの総合評価をもとに決定されていた。Tier A から BU への昇格では MLS での審査試合の評価が重要視されていた。

表 14 プロ審判機構における主な昇降格基準

カテゴリー	主な研修	フィットネス要件	昇格条件
BU	プロ審判機構 Preseason Camp	FIFA fitness test	—
Tier A	プロ審判機構 Preseason Camp	FIFA fitness test	総合評価 MLSでの審査試合
Tier B	プロ審判機構 Preseason Camp	FIFA fitness test	総合評価
Tier C	プロ審判機構 Preseason Camp	FIFA fitness test or FIFA WOMEN's fitness test	総合評価
Assigning Pool	プロ審判機構 Preseason Camp	FIFA fitness test or FIFA WOMEN's fitness test	総合評価
Non-BU	—	FIFA fitness test or FIFA WOMEN's fitness test	総合評価

第 8 項 プロ審判機構におけるアセスメントレポート

プロ審判機構が使用しているアセスメントレポート(評価方法)は、USSF で使用しているものとは異なっており、プロ審判機構で独自に開発されたものとなっていた。

プロ審判機構におけるアセスメントレポートは、4 点満点となっており、レフェリーのレポートでは 6 つの項目で評価されていた。6 項目は、判定(ファウル判定、警告、退場)、プレーヤーマネジメント(選手・スタッフとのコミュニケーション)、ゲームマネジメント(負傷者対応、アディショナルタイムの適切な採用、リスタートの管理、アドバンテージの適用)、審判員とのチームワーク、判定時のポジショニング(プレーの邪魔にならないポジション、判定時の角度など)、動き(スプリント、シグナルなど)となっていた。アシスタントレフェリーのレポートでは 4 項目で評価されており、判定(オフサイド)、その他の判定(ファウルサポート、タッチジャッジなど)、ポジショニング(最終ラインにつくことが出来て

いるか)、動き(スプリント、シグナルなど)があった。

このアセスメントレポートの評価点は 3.0 以上で良いとされ、基本的には 2.8 から 3.3 の間の点数となっていた。また、キーインシデント(PK 判定など試合とって重大な判定)をしっかりと判定した際の加点や、判定できなかった際の減点を考慮しない点数がそれぞれ出されているため、キーインシデント以外でのパフォーマンスの評価がわかりやすくなっていた。評価点は主に、2.8 から 3.3 までの幅が設けてあること、キーインシデントを加味した点数と加味しない点数の両方がわかることで、審判員のパフォーマンスの差がわかりやすい仕組みとなっていた。

第5節 アメリカのサッカー審判員関係者へのインタビュー調査

第1項 MLS 担当審判員 A 氏へのインタビュー

①プロ審判機構に関して

プロ審判機構が連盟からだけでなく、派遣リーグからの収入も活動資金としていることで、USSF からの資金だけに依存せずに活動できていることをあげ、アメリカサッカー界におけるパワーバランスが良くなったため、プロ審判機構ができて良かったと考えていた。

②キャリアに関して

BU 所属の審判員になるまでは教員として活動していたが、現在は審判活動に専念していると話していた。しかし、引退後のキャリアを考え、個人的に金融関係の仕事もしていた。引退後は、金融関係の仕事をしながらも、審判コーチなど

の形で審判界に貢献したいと考えていた。

第2項 MLS 担当審判員 B 氏へのインタビュー

①プロ審判機構に関して

支部では、各審判員に審判コーチが付き課題の改善やストロングポイントの強化などに継続的に取り組むことのできる環境が整っている。プロ審判機構においても、少人数でより集中的な育成が行いやすいようにカテゴリー分かれており、審判員同士の意見交換などが行いやすい環境や、よりインタラクティブで深い指導を行うことができる環境が整っているため、審判員のレベルアップに貢献していると感じていた。

②キャリアに関して

B 氏においても、BU 所属の審判員となつてからは A 氏と同様に審判活動に専念していた。引退後に関しては、何か仕事をしながら審判員の育成に何らかの形で関わりたいと考えていた。

③プロ審判機構での育成の実情

本部では、対面での研修(3~4 日のキャンプ)、評価、週1回のオンラインによる教育などを継続的に行なっていた。支部では、研修だけでなく USL の審判や、MLS の第4の審判としての経験を求められるので、非常に忙しいが、支部所属の審判員は自分の評価や研修への参加が優先となるが、本部が実施している研修等に参加することもできるため、成長することのできる環境が整ってい

と感じていた。

④BU 所属審判員になるまでのパスウェイ

B 氏は、IMG(International Management Group)アカデミーの近くに住んでいたため、U-17 アメリカ代表などのユースの国際試合や大学サッカーで多くの経験を詰んでいた。その後は、A リーグ(現在の USL リーグ 1 相当)や USL2 部リーグなどのプロリーグで評価を得た後に、WPS(現在の NWSL)を通じて MLS 担当審判員となっていた。MLS を担当するようになり 5 年目に FIFA ライセンスを取得し現在は国際審判員としても活動をしていた。

B 氏は、自分自身のパスウェイをユニークだと話していたが、住んでいる州や地域により経験をする試合やリーグが異なるため、全く同じ経験を得て MLS 担当審判員になることはほとんど無いと話していた。

第 3 項 USSF National Referee Coach 兼、MLS の審判アセッサー C 氏へのインタビュー

①プロ 審判機構に関して

USSF からの資金だけでなく、本部は MLS、支部は NWSL、USL-C、USL1 など派遣リーグからの予算を活用し、審判員やアセッサー、審判コーチに対する教材が豊富に用意されており、トレーニングの機会も十分に確保されているとし、審判員を含む関係者を育てることができる環境が整備されていることが良い点だと話していた。

②プロ審判機構における育成の特徴に関して

プロ審判機構における育成の考え方の特徴として、評価だけでなく課題修正のために時間を費やす点と、審判員を評価するアセッサーとは別に審判コーチがいることで、審判員の課題改善やストロングポイントの強化のための継続的なサポート体制が整っている点が挙げられると話していた。また、プロ審判機構では独自の方法でアセスメントレポートを作成しているが、このレポートにより審判員の差がわかりやすく、審判員の課題などを抽出しやすい仕組みになっている点が特徴でもあると話していた。

③プロ審判機構の近年の取り組みに関して

BU 所属審判員は 2018 年、2019 年頃に一新されており、比較的若い年齢の審判員が増加しており、支部所属の審判員についても 25 歳から 35 歳以内の審判員が多くなっていることを踏まえ、若い審判員が増加していると話していた。また、近年の取り組みとして、アトランタに VAR オフィスを作ったことで同じ審判員が週に数試合 VAR レフェリーを担当することができる環境が整備されており、リーグのチーム数拡大や NWSL への VAR システム導入に対応するための施策が行われていると話していた。

⑤組合の役割

BU に所属しているすべての審判員は、プロレフェリーの組合に所属しており、プロ審判機構と試合の審判費用をはじめ、休暇の日数、研修会の日数、研修会を欠席可能な日数、アセッサーのフィードバック内容、コロナ対策など細かな内容まで交渉を行っていることをあげ、審判員が活動しやすい環境を作ることができる制度となっていることで、プロ審判機構と審判員のパワーバランスが保た

れていると話していた。

第4章 考察

第1節 USSF とプロ審判機構の役割

第1項 アメリカのサッカー審判制度の特徴

米国の審判員制度の特徴として、USSF がグラス・ルーツから MLS、NWSL、USL-C、USL 1 等のプロリーグを除く国内リーグを担当する審判員の養成を行っており、プロ審判機構は MLS、NWSL、USL-C、USL 1 等のプロリーグ、及び国際大会の担当審判員の養成を行うという棲み分けがされていることがあげられる。

第2項 USSF の役割

USSF では、普及とトップ以外の試合を担当可能な審判員の養成、及び派遣を各州や各地域と連携しながら行っており、できるだけ多くの審判員の発掘などの普及的な位置付けであることが考えられる。

第3項 プロ審判機構の役割

プロ審判機構は 2012 年の設立以降、活動目的を「より若い年齢でレベルの高い審判員を育成し、国際大会でアメリカとカナダを代表する審判員を生み出すこと」と掲げているように、国際大会で活躍できる審判員を含むトップ審判員の育成に特化した位置付けであることが考えられる。W 杯 2014 年大会以降に 3 大

会連続でラウンド 16 を担当する審判員を輩出し、2022 年大会では決勝戦の第 4 の審判員を担当する審判員をアメリカが輩出できているのはプロ審判機構の審判員育成の成果の現れであるという事ができる。

第 2 節 プロ審判機構の特徴

第 1 項 育成プログラム

プロ審判機構における審判員育成の特徴として、アメリカ型リーグにはないカテゴリーを形成し、BU から Non-BU までの 6 つのカテゴリーでの段階的な育成過程が整っていた。また、支部所属審判員に審判コーチをつけることで継続的な育成を行っていた。

参考としてアメリカと日本におけるカテゴリーと育成過程をまとめた(図 12)。カテゴリーとは、同じライセンスであっても、担当する試合が分けられていることを示したもののため、ライセンスとは同じではない。

日本では、J リーグを担当する 1 級審判員は JFA により統括されており、トップ審判員輩出のための取り組みとして、2002 年から 2015 年までは JFA レフェリーカレッジが設立され、2016 年からは「可能性のある若手審判員を地域レフェリーアカデミーで育成・強化し、世界に通用するトップレフェリーの実現」を目的とした地域レフェリーアカデミーが設立された。しかし、JFA レフェリーカレッジの育成は 1 級ライセンス取得まで、地域レフェリーアカデミーの育成は 1 級ライセンス取得候補者である 2 級プール候補までとなっていた。このように日本における育成過程は JFA 主催の試合が担当できる 1 級ライセンス取得やその前段階までにとどまり、J1 リーグ担当審判員や国際審判員輩出までの継続的

な育成は行われていない。また、日本における育成方法として、試合後にアセッサーからのフィードバックを受ける機会はあるが、決まった人が継続的に指導しているわけではないため、長期的な視点での課題発見や改善のための取り組みは審判員自身が行っていく必要がある。

これらの点を踏まえると、プロ審判機構における育成が FIFA を目指したものであることや、プロ審判機構におけるコーチをつける等の継続的な育成は特筆した点であるという事ができ、このように段階的かつ継続的な育成環境の整備を実現した事が、アメリカのサッカー審判員のレベルアップにつながったと考えられる。

日本		アメリカ	
カテゴリー	主な担当試合	カテゴリー	主な担当試合
FIFA	FIFA	FIFA	FIFA
1級 J1担当	J1	BU	MLS
1級 J2担当	J2	Tier A	審査試合(MLS) USL-C*、NWSL*
1級 J3担当	J3	Tier B	USL-C*、NWSL*
1級 JFL担当	JFL	Tier C	USL-C、NWSL USL1
1級 NC	U-18 プレミアリーグ	Assigning Pool	NWSL、USL1
2級 プール	審査試合(JFL割当) 地域リーグ	Non-BU	審査試合(PRO割当) USL1
2級	地域リーグ		

図 12 アメリカと日本におけるカテゴリーと育成過程

第2項 プロ審判機構のタレント発掘

プロ審判機構の審判員発掘の特徴として、USSF では National ライセンスを

未取得だとしてもプロ審判機構タレント Identifiers 等のスカウトスタッフが将来有望だと認めれば、Non-BU に所属し育成の機会を得ることのできる制度があげられる。この制度があることで、審判員にとっては、若い時からトップ審判員を目指す事ができ、トップ審判員候補者と同様の指導プログラムや試合を担当できる機会を得ることでき、プロ審判機構にとっては将来的なトップ審判員候補者のタレントプールの形成が可能になるというメリットがあると考えられる。

参考として日本では、1 級受験をするためには地域協会からの推薦を得てプール審判員になる必要があるため、地域協会での実績の積み上げが必要となっていた。そのため、将来性があつたとしても数年間同じカテゴリーに在籍するケースや 2 級審判員として埋もれてしまう事があり、若いうちからトップ審判員候補者と同じ育成や試合を担当できる機会等はほとんどなかった。

これらを踏まえると、プロ審判機構における飛び級的な制度によるタレント発掘は特質しているという事ができ、より若い年齢でのトップ審判員養成の実現に繋がったと考えられる。

第 3 項 プロ審判機構の育成プログラム

プロ審判機構における、審判員育成ではアセッサー・審判コーチの派遣、USSF とは異なる独自のアセスメントレポートの使用、アセッサー・審判コーチ等の育成による育成環境の整備が行われていた。これらの育成プログラムは、プロ審判機構において独自に開発・提供されており、これらのプログラム開発や提供によって質の高い審判員の育成を可能にしたと考えられる。

第3節 プロ審判機構の成長

第1項 プロ審判機構の特徴

プロ審判機構は審判員の派遣と育成を主たる事業とするプロフェッショナルレフェリー機構であり、本部はMLS、支部はNWSL、MLS Next Pro、USL-C、USL 1 への審判員派遣と派遣審判員の育成による収益獲得やスポンサーシップ等の収入を上げることで、UUSF からの予算だけに依存することなく活動できる環境を整えている点が特徴であるという事ができる。

第2項 プロ審判機構の成長

今後MLSがエクспанションによりチーム数が増加すること、メキシコも含めたリーグへと拡大することが予想され、MLSの拡大とともに本部の収益の増加が予想される。

支部に関しても、MLSの拡大に伴う米国のサッカー人気の高まりとともに事業拡大することが予想され、MLS担当審判員を含むアメリカのサッカートップ審判員のレベル向上が予想される。

このようにプロ審判機構におけるタレント発掘と育成の成果として、今後も継続的にトップ審判員をW杯等の世界の舞台へ輩出することが予想される。

第4節 研究の限界

本研究では、アメリカのトップレフェリーの育成策について調査を行ったが、USSF で使用しているアセスメントレポートの情報は収集する事ができず、プロ審判機構の Assigning Pool や Non-BU 所属審判員の数、支部に所属するアシスタントレフェリーの具体的な人数などは公開されていない。また、アセッサーや審判コーチの具体的な育成方法が公開されていなかった。そのため、審判員養成のためのすべての要素を網羅できない点に本研究の限界がある。

第5章 結論

アメリカのトップ審判員育成では、USSF とは別により若い審判員を国際大会に輩出することを目的とした、プロ審判機構においてトップ審判員を育成するための独自の評価制度の採用やコーチ制度、研修等の審判員育成、及び審判アセッサーや審判コーチの育成による審判育成の基盤形成が行われていた。

これらの取り組みが、近年アメリカサッカー界が W 杯ラウンド 16 以降の試合を担当するトップ審判員を輩出してきた要因であると考ええる。

謝辞

本研究を行うにあたり、多くの方々にお力添えやご協力をいただきました。特に指導教員である平田竹男先生には、厳しくも暖かいご指導をいただきました。私自身が審判員としてのキャリアを築いていくにあたり、プラスになることを研究できるように導いていただきました。また、大学院生や審判員としてだけでなく、1人の人として成長することができるようなご指導をいただきました。平田先生のご指導がなければ充実した大学院生活を送ることはできなかったと思います。誠にありがとうございました。

同様に貴重なご指摘を頂きました副査の中村好男先生、論文の方向性に迷っている際にご指導いただき、論文作成を最後までサポート頂いた児玉ゆう子先生、多岐に渡りご指導をいただき最後まで丁寧なご指導をいただいた畔蒜洋平先生のご指導が論文の完成には欠かせなかったと思います。心より感謝申し上げます。

平田研究室学部ゼミ、社会人修士16期、17期のみなさま、2年制の先輩方にも大変お世話になりました。

また、論文作成だけに限らず、多くの時間を共にしてきた同期の岡田真和さん、札幌野頭さん、陶宇凡くん、そして後輩の吉田龍真くんがいたことで学生生活がより充実したものとなりました。心より感謝申し上げます。

本研究を行うにあたりアドバイスや情報をいただいた多くの審判関係者のみなさまにも深く感謝申し上げます。

最後に、大学院で学ぶことを快く受け入れ、全面的な応援と支援をいただいた両親に心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。

参考文献・引用文献

- ・ Westbrooks John(2022). What makes a Successful Referee? Determining and Evaluating the Characteristics of Successful Major League Soccer Referees.
- ・ Webb, T., O’Gorman, J., & Markham, L. (2021). Striving for excellence: talent identification and development in English football refereeing. *European Sport Management Quarterly*, 1-19.
- ・ 青山健太.日本におけるサッカー審判員育成システムに関する研究—関東大学サッカー連盟の学生審判員育成に着目して—.愛知学院大学教養部紀要 62.4 (2015): 43-62.
- ・ 上野哲. (2018). ドイツにおけるサッカー審判員の実情. 小山工業高等専門学校研究紀要, 51, 1-6.
- ・ 岡村徳之.(2020). 日本におけるテニス国際審判員育成の問題点と解決策—ハイウェイ オフィシャル プログラム (HOP)の提案
- ・ 備前嘉文. (2011). 審判を取り巻く環境の現状と課題について-審判の社会的地位向上に向けての提言. 天理大学学報, 227, 65-76.
- ・ 2002 年 FIFA W 杯公式記録
「<https://www.fifa.com/tournaments/mens/worldcup/2002korea-japan>」 (2022 年 12 月 20 日閲覧)
- ・ 2006 年 FIFA W 杯公式記録
「<https://www.fifa.com/tournaments/mens/worldcup/2006germany>」 (2022 年 12 月 20 日閲覧)
- ・ 2010 年 FIFA W 杯公式記録
「<https://www.fifa.com/tournaments/mens/worldcup/2010south-africa>」 (2022

年 12 月 20 日閲覧)

- ・ 2014 年 FIFA W 杯公式記録

「<https://www.fifa.com/tournaments/mens/worldcup/2014brazil>」 (2022 年 12 月 20 日閲覧)

- ・ 2018 年 FIFA W 杯公式記録

「<https://www.fifa.com/tournaments/mens/worldcup/2018russia>」 (2022 年 12 月 20 日閲覧)

- ・ 2022 年 FIFA W 杯公式記録

「<https://www.fifa.com/fifaplus/en/tournaments/mens/worldcup/qatar2022>」
(2022 年 12 月 20 日閲覧)

- ・ 扇谷健司(2022)「JFA news 公益財団法人日本サッカー協会機関誌」

No461,p5.6

- ・ 山田修平(2022)「JFA news 公益財団法人日本サッカー協会機関誌」

No461,p10.11

- ・ 日本サッカー協会ホームページ「<http://www.jfa.jp/>」 (2023 年 1 月 7 日閲覧)

- ・ アジアサッカー連盟ホームページ「https://www.the-afc.com/en/about_afc/referees.html」 (2022 年 12 月 27 日閲覧)

- ・ Professional Referee Organization ホームページ「<https://prereferees.com/>」
(2023 年 1 月 10 日)

- ・ アメリカサッカー連盟ホームページ「<https://www.ussoccer.com/>」 (2023 年 1 月 10 日)

- ・ ワイオミング州サッカー協会ホームページ

「<https://www.wyomingsoccerreferee.com/referee-pathway>」 (2022 年 12 月 29

日)

・アメリカユースサッカーホームページ「<https://www.usyouthsoccer.org>」

(2022 年 12 月 23 日)

・MLS 審判員になるためのプロセス「<https://www.mlssoccer.com/news/how-do-you-become-mls-referee-process-grassroots-explained>」(2023 年 1 月 25 日)